

令和5年9月1日発行 春燈/第78巻第9号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2023 September

9  
月号



# 安住敦の句

## 芙蓉咲くしづけさにあり百ヶ日

『歴日抄』昭和四十年

この句は、師・久保田万太郎が急逝して百ヶ日の昭和  
三十八年八月十三日、浅草伝法院においての句です。

安住先生の句は、いつも人生の悲しさ淋しさの中にし  
みじみとした暖かい人柄がにじんでいます。この年の笑  
蓉咲くかぎり白露結ひけりも芙蓉の花の優しい美しさ  
と、春燈を受け継ぎ灯を消さな。師への誓いと志の強い  
決心を読み取れる句です。

渡辺若菜

# 冬の坂に転倒せるは家人に秘す

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

春燈俳句会発行『安住敦主句集』の年譜によれば師は、昭和六十三年、八十一歳で亡くなられている。

迫り来る老いの気配をどうすることも出来ず、やるせない思いの日々を送られていたことであろう。

私も何時の間にか師の齢を越え、過日、わずかな車止め足を取られて転んでしまった。

「家人に秘す」と言う思いが胸に迫るのである。

後 藤 大

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

十葉の花の寄りそふあしたかな

郵便の来ない土日や金魚玉

遙かなるものとなりしや桜桃忌

十葉の家々のこゑ聴いてをり

父の日とひとり呟く雨の中

天道虫死して背の星耀かす



薫風に干しある衣裳色揃へ

胸高の帯で無口や初浴衣

生え競ふ荔枝の丈や日を跳ぬる

泰山木の花みな天を仰ぎけり  
(悼・嵐楓子様)

# 当 月 集

鈴木直充選



○ 西村洋平

井戸水を木桶に受けて夏蒨

うまさうな話など無し豌豆むく

輪唱の水輪を揚げ水馬

夏ぐみの大木村の子を育て

あぶるるも住まふは大地太みみず

○ 川端正紀

涼しさや蕪村句集の拾ひ読み

駒音も腕もにぶれる梅雨入かな

鱧食うて清盛公を偲びけり

かぶと虫童が語る強力伝

瀬戸育ちは食道楽ぞ鱧の皮

○ 立竹人

春水にわが影ゆらぐ日暮かな

谷川のながれに適ひ河鹿笛

宇治川の風をつよさや新茶汲む

子の窓に仙人掌小さき花ひとつ

身ほとりのゆふべさみしき夏椿

○ 大槻祐二

婚の荷を狭しと映す金魚鉢

細き首立てて威嚇の羽抜鳥

隣の家生家としたり燕の子

妻留守の自足二十日や柿の花

夏めくや川面に揺るるなまこ壁（倉敷）

○ 福田水明

いつまでも海を見てゐる沖繩忌

海へ出る一本道の暑さかな

膳本に除籍の二文字走馬灯

羽根に疵浜の飯屋の扇風機

おほかたは蓄つばみのはちすかな

# 春燈の句

鈴木直充選

辞儀をして泰山木の花仰ぐ

気に入りは庭石の角墓

袋掛けの葡萄の実る理髪店

風呂の窓親子の守宮餌をさがす

凡人に生まれ笑ふや桜桃忌

経理課で見せぬ素顔や藍浴衣

江ノ島の人慣れの猫夏木立

加害者の父となりたり蟻の列

梅雨雲のあはひの青嶺仰ぎけり

杖置いて若葉の風に吹かれける

馬鈴薯の花に風立つ母の忌や

夏帽子褒めあひ被りなほしけり

洪面の不動尊下に滴れる

神馬にも軽き一礼梅雨詣

東京 加茂 静子

神奈川 守口慎太郎

栃木 森 ふく

三重 水谷 甚

檻樓なす地蔵の唾当て梅雨の果

ほととぎす城の戌亥に櫓門

卯の花のひそかに雨意を兆しけり

梧桐の肌いきいきと雨上がり

紫陽花の乱れに乱れ今日も留守

夕焼やビニールハウス焼き尽くし

箒目の波に踊るや落椿

逝きし師に見えてまろまる梅雨の月(鶴来先生)

人の計に羽の重たき梅雨の蝶

青嵐人の別れの重さかな

いやいやの増ゆる赤子や杏の実

蟻螻を払はぬ僧の手の大き

旅慣れぬ夫婦の歩幅小判草

青葉潮真砂女の帯の胸高に

埼玉 大谷満智子

群馬 小菅 澄重

山梨 川井真理子

